



滋賀県立彦根翔西館高等学校

能政 愛子 Nose Aiko

在カンボジア日本大使館

今田 晃憲 Imada Akinori

2023 FEBRUARY

09

地結人

卒業生の今



USP ★
STARS | 09
2023
FEBRUARY



滋賀県立大学 OBOG Magazine
県大の星 第9号

発行月 | 2023年2月
発行 | 滋賀県立大学 経営企画課
〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町 2500
Tel.0749-28-8200 Fax.0749-28-8470

- CASE -

01

地 結 人

Nose Aiko

能 政 愛 子

滋賀県立彦根翔西館
高等学校
教諭

化学に没頭した6年間
研究への熱意を生徒に向けて
理科を学ぶ楽しさを伝える

キャンパスは琵琶湖。
テキストは人間。

このモットーを胸に
社会で活躍する卒業生の原点に迫るインタビュー

実を結ぶまで 果てない探究心

夢中で打ち込んだ経験は、
自分をつくるアイデンティティに。
今回は、大学時代に突き詰めた専門分野を
仕事に結びつけるお二人にお話を聞きました。
一人は、高校時代から魅了されていた化学分野を極め
滋賀県の高等学校で教鞭をとる能政 愛子さん。
もう一人は、在カンボジア日本大使館に在駐して
社会経済状況の改善を目指す
専門調査員の今田 晃憲さんです。
同じ「滋賀県立大学」の土地で
積み重ねた知識と経験が結実し、
それぞれの場所で活躍するお二人。
一つのことを突き詰める、果てのない探究心の源である
学生時代の体験を振り返りながら、
これからの展望を語っていただきました。

県大の星

地結人

卒業生の
今



「面白い」の気持ちをきつかけに
材料科学科へ

高校生のとき、化学のテストだけは常にクラスで上位を目指そうと決め、力を入れて勉強していました。理由は単純で、化学という分野そのもの、特に実験を面白いと思っていただけです。物質を混ぜると無色の液体がオレンジ色に変化するなんて、まるでマジックみたいじゃないですか。材料科学科に入ったのも、面白い現象をもっと知りたい、生み出したいという好奇心がきっかけでした。

入学後すぐは基礎を学ぶ授業が中心でしたが、1年次から実験の授業もありました。自分の手を動かす、目で見ることで、テキストには載っていないたくさんの気づきを得られます。教授からも「実験は大事だ」とレポートの書き方や実験器具の使い方などを教わり、手厚く指導してもらいました。外せない用事で実験の授業を休んでしまったときは、後日1対1で実験の補習を受けたこともありま。顔と名前を覚えてもらっていたので、授業でわからないことがあれば気軽に研究室に質問に行くことができました。1年次から主体的に学べる環境があったからこそ、化学の面白さを実感でき、研究活動への意欲も強くなっていったのだと考えます。

を決めたので、余計に大変だと感じたのかもありません。しかし、今の仕事ができているのは当時の頑張りのおかげなので、挫けずに最後までやり切った良かったです。

リニアモーターカーの機体となる
プラスチック材料の研究開発

本格的な研究が始まったのは3年次以降です。4年次の研究室配属では金属材料、セラミックス材料、エネルギー環境材料、有機複合材料、高分子機能設計、有機環境材料の6分野に分かれるので、自分がテーマにしたい材料を考えながら、それぞれの分野を幅広く勉強しました。その中で私が選んだのは、有機複合材料研究室です。プラスチックの原料を溶かし、他の原料と複合させ、性質の良い材料を作り出すという、材料開発の研究をしていました。

目標としていたのは汎用プラスチックであるポリエチレンの複合化による低コストで成形性が良く、低温物性が良好な材料の創成です。例えば、リニアモーターカーに使えるプラスチックの開発です。リニアモーターカーは極低温になると「超電導」という現象を生じる磁石を利用し、その強力な磁石の力で浮遊し進みます。磁石の力で浮いて滑るので、摩擦が生じずに早く進むのです。現在開発されているリニアモーターカー用の超伝導磁石に必要な極低温を長時間保持できるケーシング部材をプラスチックで軽量化できれば、さらに性能の向上が図



研究成果は日本材料科学会

れるのではないかと考えました。ただ、ネックとなるのが、プラスチックはマイナス50度よりも低い温度になると、ガラスのように割れてしまう「低温脆性」という性質を持っていることです。そこで、低温に打ち勝てる材料を開発することを目指しました。

研究はとにかくハードでした。サンプルのプラスチックを作っては衝撃強度を測定するために破壊、作っては破壊の繰り返し。3、4日かけて手作りした試料でも、割れるときは一瞬です。研究室のメンバーと使用する実験装置が重なることや、実験に長時間かかることもあり、夜に泊まり込みで実験したこともあり。いくつものパターンを想定して試料を作り、月例報告会で教授や研究室メンバーに指摘を受け、4年次から大学院修了までの3年間はひたすらトライ&エラーの連続でした。

卒業研究では、割れたサンプルの断面図を観察し、使用する材料だけでなく、製法自体を変えたほうが良いのではないかと気が付きました。それまではただ材料を混ぜていましたが、材料を50μmの薄いフィルム状にして層状に重ね、押し固めることでサンプルを作りました。そうすると、物質一つ一つの接着が変わり、割れ方が変わることが観測できたのです。結果、マイナス150度でも割れないプラスチックを作り出すことに成功しました。

「やっとなってきた」という感動は、今でも忘れられません。大学院では低温領域における脆性破壊メカニズムを説明することに挑戦しました。

材料を研究し、開発したりサイクルプラントを県内で流通させること、学生が行う地域課題への取り組みを大学として支援する「近江楽座」にも採択され、活動を展開しました。計画は功を奏したようで、そのプラントは2009年にエコマーク認定を受けて商品化されました。

研究室所属後、プラントの宣伝やボランティアなどを県内で流通させること、学生が行う地域課題への取り組みを大学として支援する「近江楽座」にも採択され、活動を展開しました。計画は功を奏したようで、そのプラントは2009年にエコマーク認定を受けて商品化されました。

廃棄物バスターズの活動の一環で就労支援B型作業所へ訪問した際に、ペットボトルの「シールがし」を仕事にされている方の話を聞きました。その方々は、ペットボトルの蓋をモップの柄の材料とする製造業者から依頼を受けて仕事をしていました。しかし、事業の終了が決定したと宣告され、困っていたそうです。そこで、ペットボトルの蓋をリサイクルプラントの材料に使わせてもらうことを提案しました。さらに、利益を出すために、プラントに花を植えて県内の企業にリース販売する事業モデル「hana.wa」活動を提案。実現に向けて、仲間と何度も県内企業に

提案しました。さらに、利益を出すために、プラントに花を植えて県内の企業にリース販売する事業モデル「hana.wa」活動を提案。実現に向けて、仲間と何度も県内企業に



能政さんまつわる
れれ
AREKORE

▶ 授業アイテムたち

自作した結晶格子の模型や、廃棄物バスターズで活用していたリサイクルプリンターなど、オリジナルのアイテムを使って授業をしています。



▶ 一眼レフでの撮影

長女出産に合わせて一眼レフを購入。日課のように子どもの成長記録を撮影しています。学校の桜を撮影した写真は、学校紹介パンフレットに採用してもらいました。



▶ 目の錯覚を起こす「猫長」

1枚目と2枚目の写真に映る「猫長」は、置き方を変えただけで実は同じ長さ。大学の授業で目の錯覚の不思議な現象として見せてもらい、個別で教授に作り方を教えてもらいました。年度初めの授業では導入としてこちらを見せ、目に見えない現象の面白さを生徒に伝えています。



nyan

nyan

家庭教師の経験で培った自信が
教員の道への扉を開く

研究活動を続けたいと思い、就職活動の初めはプラスチック関係の企業を受けていました。しかし、30社ほど受けても内定は0でした。めげそうになった矢先に目に入ったのが、大学を通じて届いた高校理科講師の募集メールです。1年次に教職課程を履修したおかげで教員免許を持っていたので、条件に不都合はありませんでした。親族に教員が多い家庭に育ったので、教員として働くイメージもつきました。そして何よりも私の背中を押したのは、家庭教師のアルバイト経験です。教えることにやりがいを感じ、学部の1年次から続け

誌にも掲載され、国内だけでなく海外の学会でも研究発表をしました。企業とタッグを組んで進めた研究でもあるので、引き継いだ成果をさらに進化させてもらえれば、いつか本当にリニアモーターカーの材料になるのではと期待しています。

環境団体「廃棄物バスターズ」として
新たな地域活性化事業をスタート

研究生生活はハードでしたが、乗り越えられたのは研究室の仲間のおかげです。先輩後輩、同期、教授とは家族のような関係で、定期的にスポーツ大会や誕生日パーティーを開催しました。先生の口くせでもある「研究と遊びのメリハリをつけなさい」という言葉通り、遊ぶときは思い切り弾けました。

遊びがアクティブな分、研究活動もアクティブなのが有機複合材料研究室の特徴。先輩方から引き継いだ「廃棄物バスターズ」としての活動も活発でした。廃棄物バスターズとは、廃棄プラスチックを使用して強度の高い材料を作る研究をしていた先輩方が始めた環境団体です。最初の目的は、企業と共同で

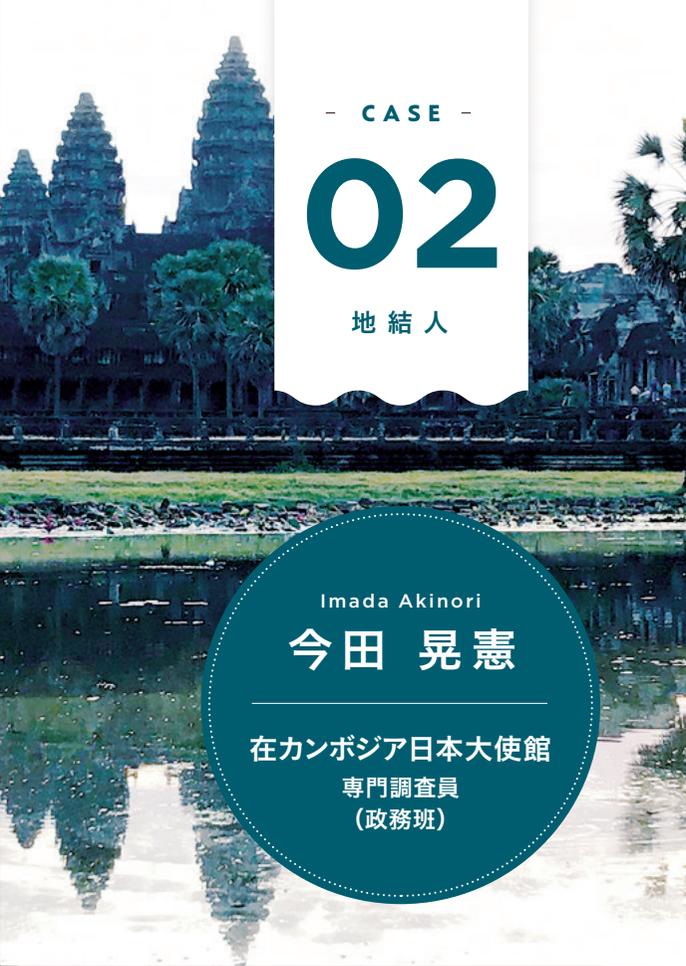
足を運んで協力を仰ぎました。道のりは長かったですが、「企業と就労支援者の方のどちらでもWin-Winな関係を築けるね」と理解してもらえました。活動がスタートしたときは、喜びと同じくらい、安心したことを覚えていきます。

修了後「hana.wa」活動は先輩が受け継ぎました。2学年下の後輩は社会貢献活動の発表をする大会「Enactus」で優勝し、メキシコで開催された「Enactusワールドカップ」でもプレゼンを行ったそうです。後輩の活動も、私たちの活動も、先輩の代から築き上げた土台があったからこそ実現できました。先輩方を尊敬するとともに、その土台を大きくできたことを誇りに思います。これから先も、「廃棄物バスターズ」のさらなる発展を願っています。



SIFE※国内大会出場

※SIFE(Students In Free Enterprise)は、アメリカ合衆国に本部を置くNPO。主に、大学生が企画・実施する社会貢献事業に対する支援を行うことにより、優れたリーダーを養成することを目指している。なお、2012年にSIFEは組織名称をEnactusに変更している。



- CASE -

02

地 結 人

Imada Akinori

今田 晃憲

在カンボジア日本大使館
専門調査員
(政務班)

大学で培った対話力を強みに
人々が平等に恵みを享受できる
世界を実現したい



ていました。一人の子を3年間受け持ったり、中学生の期間だけと依頼されていた生徒から高校生以降も教えてほしいとお願ひされたら、愛情を持って生徒に接してきたからこそ、数々の嬉しい思い出があります。家庭教師として培った経験が自信につながり、教員の道へ歩み出すことができました。

大学時代を思い出して トライ&エラーで突き進む

教員の大変なところは大学で学んだ化学だけでなく、全ての理科学分野を教えるなければならないこと。採用試験は化学分野で通りませんが、いざ学校現場に入ると、生物も物理も地学も学び直さなければなりません。大学ではブラッシュアップした研究をしていたので、専門である化学さえも学び直しは必須でした。

ただ、学び直すことに抵抗はないんです。大学時代のブラッシュアップ研究も、教員としての授業研究も、根本は同じ。考えて、実践して、ダメだったところを改善する、トライ&エラーの繰り返しです。どうしたら高校生は理解してくれるだろう」と想像を膨らませて試行錯誤する日々は、大学時代を彷彿とさせます。異なるのは、正解がないところでしょいか。目指すべき一つのゴールがあるのではなく、そのときの生徒やクラスの特性に合った授業を組み立てなければなりません。担当するクラスの生徒が「わかった」となる瞬間の表情を思い浮かべながら、授業を考えています。

授業づくりには正解がなく行き詰まることも多いです。そこで思い出すのは大学で受講して



いた研究室の担当教授の授業。いつも身の回りにあるものと関連させながら、取り扱うテーマに関する知識を教えてもらっていました。教授の授業だけは眠たくならず、常に楽しんで学べたことと覚えています。ですので、自分の授業にも「自分ごと」として学ぶスタイルを取り入れるようにしました。例えば生物の授業で内臓に関して学ぶとき、「牛やガチョウの肝臓って食べ物にするって言うかわかる？」と教科書に載っていない情報を生徒に聞きます。答えは黒板に書くだけでなく、実際の写真を見せながら解説して、理科の知識と同時に日常生活に結びつく情報を伝え、興味を引き出すようにしています。

日々工夫と努力を重ねているからこそ、生徒からの「授業が楽しかった」という言葉は心に沁みます。特に嬉しかったのは、卒業生から言われた「授業で言っていたあの言葉は今も覚えていっている」という一言。日々を過ごすうちに学生時代の記憶は薄れていくものですが、きつと誰しも記憶に残るエピソードを持つていると思います。私の授業がその一つになったことを、とても幸せに感じました。

持つこと。クラスの一人ひとりに愛情を注ぎながら1年間の成長を見守れるのは、担任の特権です。短期間で体も心もぐんぐん育つ高校生の姿にパワーをもらえました。まだ経験がないので早く同じ学年の生徒を1年生から3年生まで一回り受け持ちたいです。

何でもできる大学時代 選んだ道を信じてチャレンジ

今は教師の仕事を中心に楽しんでいます。大学時代は教師でなく研究職を目指していたと生徒にも伝えていきます。初めの夢は叶いませんでしたが、化学に没頭する6年間を選んだからこそ、企業と共同した研究活動や廃棄物バスターズなど、他ではできない体験ができました。大学時代は良くも悪くも自分次第なので、ぼーっと過ごせばぼーっと終わります。私はやりたいことに挑戦し続けたので、卒業時には大きな満足感がありました。琵琶湖や荒神山に囲まれた自然豊かな環境でのびのびと過ごし、先生や仲間たちとハイレベルな研究に打ち込んだ大学生活は、宝物のような思い出です。

目指したい教員像や試行錯誤する力、人とのつながりなど、今の私が大切にしていることは、大学で見つけたものばかり。生徒に理科を楽しんでもらいたいのも、化学に対する愛情の延長線にある気持ちです。大学時代の経験は、きつとその先の将来につながります。学生のみならず、自分の選んだ道を信じて、積極的に今しかできないことへチャレンジしてください。

能政 愛子 のせ・あいこ

[工学部 材料科学科 2010年度卒業、大学院工学研究科 材料科学専攻 2012年度修了]

大学院修了後は2つの高等学校を経て、滋賀県立彦根翔西館高等学校に配属された。理科教諭として教壇に立つとともに、教務課での教科書採択業務・定期考査業務や進路課での進路指導を経験。現在は1年生の担任を受け持ちながら、陸上競技部の顧問を務める。

※滋賀県立大学は令和5年4月から工学部材料科学科から工学部材料化学科に名称変更します。



大自然の中での学びに魅力を感じて 滋賀県立大学へ

小さい頃から自然が好きで、高校では山岳部に所属していました。山や川に触れる機会が多く、次第に環境問題へ関心を持つようになり、大学での学びも研究室の中で完結するものではなく、自然や人々と触れ合いながらアクティブに学びたいと考えていました。そんなときに知ったのが、フィールドワークによる学びを特徴とする滋賀県立大学の環境科学部でした。琵琶湖という恵まれた環境を勉学の糧にできる滋賀県立大学では、雄大な自然や周辺のコミュニティと関わり合いながら、勉強に没頭できると思います。入学を決意。大学での学びを通じて、環境の分野の中でも、開発途上国における水資源の不足を専門に研究することにしました。

フィールドワークで課題を可視化する 面白さを知る

入学後は、バイトなどのバランスをとりながら、勉強や研究にのめり込む毎日でした。フィールドワークを通して、基本的なデータの取得から、客観的にデータを分析する方法、伝えやすいレポートの書き方など、初歩的な研究の手法を学びました。研究の題材は琵琶湖周辺の自然や滋賀県内の地域や人々といった身近なものが多かったです。データに基づいて分析し、レポートにまとめることで、慣れ親しんでいたものの中から、今まで気づけなかった新たな発見もありました。隠れていた課題を、フィールドワークによる研究を通じて明



らかにしていく面白さを体感できました。

学部時代に一番鍛えられた力は 相手の考えを引き出し、分析すること

転機となったのは、2年次に卒業研究に向けたゼミ形式の授業で、NGOの様々な取り組みを調査したことです。特に印象に残っているのが、上総(かずさ)掘り井戸という明治時代に日本で考案された手法を用いて、開発途上国の水不足問題に取り組んでいた日本のNGOの事例でした。この取り組みは、導入する国の人々が自分たち自身で簡単に運用できるのが大きな利点です。日本の伝統的な技術を用いて海外の課題を解決できるということに、とても感銘を受けました。

この授業をきっかけに途上国で活動するNGOに強く興味を持ち、社会調査の知識や技術を用いて、世論や市場動向、社会事象などをとらえる社会調査士の資格の取得を目

指すように。その一環で、NGOを題材として調査を進め、自発的にインタビュー調査を実施しました。ゼミの先生にもお手伝いいただきながら自分で質問項目を作成、アポイントをとって取材し、お伺いした話をレポートにまとめることを何度も繰り返し行いました。ヒアリングを行ったのはおおよそ40団体。ほぼ全て直接訪問しました。また、できるだけ正確に各団体の特徴を聞きだすために、綿密に質問項目を考えたり、自由回答形式の質問も多く取り入れたりなどの工夫を施しました。卒業研究では、収集したヒアリングデータを元にNGOの運営方法や課題などを分類しました。調査を通してNGOに関する専門的な知識を得ることができたのはもちろんですが、なにより大きかったのは、インタビューを通じて、詳細な情報や発言の背景にある考え、感情なども深く掘り下げる調査力を得たことです。このスキルは今の仕事でも大きく活かしています。

国際協力への関心が高まる中 カンボジアへの訪問が人生の契機に

環境、特に水資源を専門として学ぶ中で、開発途上国というキーワードが明確にひもつくようになったきっかけは、とあるテレビ番組でした。「茶色く濁った水を使用し、子供や女性が水を汲むために遠くまで歩く」というコピーがとてもショッキングだったのを覚えています。開発途上国の水資源や環境への問題意識は、NGOの方々にインタビューする中で、さらに強くなりました。専門性を活かしつつ、途上国の課題を解決できるような職に

就きたいと具体的に考えるようになったのもこの頃です。

カンボジアに初めて訪れたのは大学院1年次の海外実地研修という授業でのことでした。実際に行ってみるとゴミが道路や川の周辺に散乱していて、日本と大きく異なる風景に驚きました。しかし、それ以上にカンボジアの方々がとても温和で親日的で、カンボジアのことが好きになりました。この訪問がきっかけとなり、カンボジアを題材として修士論文を書くことに。書き進めるうちに何となくこの国の開発に関わりたいと考えてるようになりまし

た。大学や大学院で学んだ開発や環境に関する専門知識をグローバルなフィールドで活かしたいと考え始めたときに知ったのが、専門調査員という仕事でした。専門調査員は、世界中の在外公館(大使館など)で語学力や専門性を活かしつつ、派遣国・地域の政治、経済、文化などに関する調査・研究及び館務補助を行う仕事です。最初はカンボジアでの専門調査員の募集は出ておらず、他の国の調査員を志望していました。面接が進む段階で急遽募集が出たため希望派遣先を変更したところ、無事採用いただけることになりました。カンボジアという国との縁を強く感じました。

専門調査員として 多様な関係者と意見交換をし カンボジアの市民参加の推進に尽力

現在は専門調査員として、カンボジアの内政や人権状況、国際機関などとの連携に関する業務を担当しています。例えば、内政や人



数々の交渉を切り抜ける中で 磨かれていく対話力

仕事柄いろいろな立場の人と話す機会が多く、大学で磨いたコミュニケーション能力が活かしていると実感する場面が多いです。傍から見たらただ単に会話しているように見えると思いますが、相手に会う何日も前から報道や関連資料を調べて、どのように相手の考えを深掘りしようか検討します。今回の会話でこっちは押さえておきたいと思うポイントや、報告書にまとめることまで考えながら話を進めていくのです。一方でヒアリングをする前に、「こういう方向でまとめたいな」と決めすぎてしまうと、ミスリードを招いてしまう可能性もあり、手腕が試される部分でもあります。考えてきた課題が本当に正しいのか、ヒアリング対象者にとっては何が問題なのかをくみ取るのが非常に難しいです。また、機微で複雑な問題を扱ったり、特にお互いの考え方が異なる場合、ちょっとした一言が相手を不快にさせたり、信頼関係を害することがあるので、相手の過去の発言などから相手自身や所属組織の見解を分析し、自分の発言内容も事前にまとめておきます。事前の準備、そして臨機応

今田さんまつわる



AREKORE

幅広い分野に挑戦できる 専門調査員の仕事

カンボジアの教員養成校で、民主主義や選挙について啓発活動をしました。また、カンボジア国内情勢だけではなく、ASEAN首脳会談といった国際会議に関する業務に携わることも。今の仕事は本当に携わる分野の幅が広いです。広範な知識が必要とされるため、日々勉強で目まぐるしい毎日ですが、吸収した知識で国の発展へ貢献できる、非常にやりがいのある仕事です。



様々な場面で 活かされる対話力

カンボジア政府と市民社会組織の対話イベントが行われた際の1枚。日本大使館の代表として、カンボジア政府と市民社会組織の政策や開発についての対話を傍聴し、その休憩中に外交官やNGO関係者と意見交換をしている様子です。異なる立場や考えを持つ様々な人々と議論するのは、容易ではないですが、持ち前のコミュニケーション能力を活かして接しています。



カンボジアでは、政治状況や文化など、日本とは異なる部分も多く、日本でうまく行くアプローチが必ずしも通用する訳ではありません。先進国の考えや制度を無理やり押し付けるだけではなく、カンボジアの社会状況を理解しながら、カンボジアに適した形で、市民参加を推進し、さらに持続可能な発展につながるようにお手伝いしています。

県大時代の思い出アーカイブ

大学時代の思い出の数々をお伺いしました



研究室の スポーツ大会

スポーツ大会では、普段の実験器具に向かう真面目な姿からは想像できないくらい、先輩、同期、教授のみんなで駆け回って楽しみました。



廃棄物バスターズ

代表も務めた廃棄物バスターズ。彦根近辺を活動拠点に、清掃活動や、商品の宣伝、新しい事業モデルの提案など、今ではできない様々な経験ができました。



能政 愛子さんの 思い出



実験機材

写真に映るのは研究で最も多く利用したシャルピー衝撃試験機です。実験装置は研究室のメンバーと取り合いになるので、予約必須です。



今田 晃憲さんの 思い出



研究室

卒業研究のために毎日通った場所です。時にはゼミの先生や友人とご飯を食べたり、映画を観たりした憩いの空間でもありました。日本に帰国する度に、当時の先生や友人と会っています。



湖をはじめとした 滋賀の大自然

滋賀県立大学はフィールドワークが盛んです。その際に調査対象となるのが琵琶湖や、その周辺の自然豊かな地域。今の仕事の基礎でもある実地調査の手法について、一から学んだ思い出深い土地です。



イングリッシュルーム※

国際コミュニケーション学科の建物にある部屋です。英語でのコミュニケーション能力を高めるため、毎週ここで留学生と会話しました。その結果、異文化への理解を深めたり、英会話の能力を向上することができました。

※現:コミュニケーションラウンジ



変に話を進めていく感覚とスキルは、滋賀県立大学でのフィールドワークやNGOの調査を通じて養ったものが活かされていると感じます。

日本政府とUNDPのプロジェクトでは、カンボジア政府とNGOの対話促進を目指しています。立場や活動分野が異なる、いろいろな政府機関、団体、人が関わる中で、建設的有意義な対話を実施することは容易ではありません。また、案件を進めるうえで、日本政府、国連、カンボジア政府、NGO、それぞれの立場でいろいろな要望や考えを持っています。その中でいかに折り合いをつけて案件を進めていくか考えることも専門調査員の役割です。そのためには、苦しくても粘り強くそれぞれの関係者と意見交換して打開策を模索します。みんなが納得できる方法を少しずつ探りながら、意見やアイデアを調整し、伝えていくというバランス感覚が重要になってきます。大学時代から築いていたコミュニケーション能力に、論理性や交渉力を上乗せできるように現在進行形でスキルを磨いています。

もっと広い視野を持って

諸外国の持続可能な発展に貢献していきたい

いろいろな国や団体が様々な開発支援の手を尽くしているのに、どうして一部の地域

では貧困といった社会問題がなくなるのか。研究や仕事を進める中で、幾度となくぶつかった難題です。原因の一つとして、社会的な格差や不平等が影響しているのだと個人的には考えています。苦勞してプロジェクトを導入・実施しても、その恩恵が村の一部の人たちだけで独占されてしまい、本当に支援を届けたい人々のところまでうまく届かないという実情があります。例えば、飲料水の不足というシンプルそうな問題であっても、ただ単に井戸を設置すれば良いという訳ではなく、住民間の関係性、教育水準、社会文化、政治状況といった多くの要素を踏まえて、現状や課題を理解し、対処していく必要があります。そのためには、統計のような定量的データだけではなく、広い視野を持ってその地域の人々とのコミュニケーションを図り、表面化していない課題を探り、施策を練ることが大切です。これがカンボジアでの研究や専門調査員として経験した中で学んだことの一つです。不平等や格差の是正は、非常に難しい問題ですが、幅広い視点で問題を明らかにし、改善策を講じていくことが、私の大きな目標です。そのために、今後も、さらに自分の専門性を高め、経験を積み、現場に寄り添いながら、活動していきます。

しかし、自分の実力や専門性に応じて、キャリアを重ねていくことができます。引き続き、開発途上国の不平等の是正、民主主義の促進やガバナンスの強化を実現し、様々な課題を根本から解決していきたいと考えています。

悩む前にはまず行動してみることで見えてくる自分だけの目標

学生のみなさんは自分が何をしたいか、どんな仕事に就きたいか、将来に関する悩みは多いと思います。しっかりと考えて進むことも大事ですが、悩みすぎず、先生や先輩を通じて人に会ってみたり、活動に参加したり、行動を起こしてみるのも大事だと思います。自身、学生時代に明確な目標を持っていた訳ではありませんが、「自然の中でフィールドワークを通じて学びたい」「講義で関心を持ったNGOの話の直接聞きに行きたい」など、そのときやってみようと思ったことを行動に起こしてきた結果、今の自分があります。

また、「やってみよう」を実現する手助けをしてくれた先生方の存在も大きかったです。滋賀県立大学には、学生の行動を親身になってサポートしてくれる先生方が多く、学業や就職活動以外にも相談できる環境がたくさんあります。もし、何かやってみよう、学業や就活活動以外でも相談できる環境がたくさんあるのかもしれないかもしれません。常にアンテナを高く張って、自分の関心のある情報を収集し、ネットワークを広げることを意識してみてください。そうして得たつながりや経験が糧となり、自分が成し遂げたことがたくさん明確に見えてくるはずです。

今田 晃憲 いまだ・あきのり

[環境科学部 環境政策・計画学科 2017年度卒業]

環境科学部環境政策・計画学科を卒業後、名古屋大学大学院国際開発研究科に進学。修了後は専門調査員としてカンボジア日本大使館(政務班)に就任する。現在、カンボジアの内政や人権状況、国際機関との連携に関する業務を担当。専門性やコミュニケーション能力を活かし、多種多様な国際機関とも連携しながら、カンボジアの社会発展に貢献するための施策実施に尽力している。

